ふるさと文化祭

福崎町文化協会副会長　秋武千賀子

福崎町文化協会主催の主な行事の一つに「ふるさと文化祭」があります。

文化協会発足の年に第一回を、そして今年（平成二十年）一月二十七日には第二十一回を開催しました。

第一回から第十二回までは「ふるさと文化祭」と称し、コーラス、大正琴、マーチングバンド、マンドリン、吹奏楽、金管バンドなどの演奏で構成されていました。第十三回からは、「福崎町の歴史や伝承を大切にし、その上に立った新しい文化の創造に努め、町の発展に尽くす。」という文化協会の目的をもう一度しっかり考え直し、それまでの音楽祭に加え伝統芸能も取り入れていこうと、その名称を「ふるさと文化祭」と改めました。

そして、福崎町の社寺に伝統的に引き継がれている、鬼追い、浄舞、浦安の舞、鬼太鼓など、また、和太鼓、謡曲、仕舞、箏曲、尺八、民謡、吉備舞など日本の伝統芸能の披露にも取り組んでいます。

平成十九年二月十一日には、ふるさと文化祭第二十回と町制五十周年記念行事として、「短歌・書・華のコラボレーション」を行いました。

山桃忌奉讃短歌祭での通泰賞受賞作品の朗詠に合わせ、その作品を筆で書き下ろし、同時に自然の草花を生けるというすばらしい共演でした。

ここに、文化協会の主催・共催する二つの事業「ふるさと文化祭」と「山桃忌奉讃短歌祭」が一つとなったことを実感し、文化協会の力強い歩みを確信しました。それは、まさに成人式を迎えたような喜びでもありました。

さて、文化祭と申しましても、本来「文化」とは何を意味するのでしょう。その答えは、「福崎町文化」第三号「福崎文化と柳田國男」と題された越川正三先生の文の中にありました。

「文化というのは、人間が自分たちの暮らしを楽しくし、便利よくするために工夫したり作ったりしたもののすべてを指す。だから人間が手を加えたものはすべて文化なのである。」と。

また、その文の中に柳田國男先生の講演の一部が引用されています。

「文化は楽しいものであるべきだ。その楽しさを高めていくことが文化の向上なのだ。そして、この楽しみは、多数の人が一緒になって喜び合うことを意味する。」

この柳田國男先生のお話に、ふるさと文化祭をあてはめてみます。それぞれの演奏、それは演じている人も、聴いている人もお互い楽しんでいます。

演奏は歳月を重ねるごとに目に見えて輝きを増しています。また、出演者も、保育園児、幼稚園児、小学生、中学生、高校生、大学生、一般の方とすべての年齢層にわたり、多数の人が一緒になって楽しんでいます。

まさに、お話されているとおりになっています。

このように、音楽・芸能を通して、柳田國男先生の文化についての講演のようにみんなで楽しく交流ができていることは、本当にうれしいことです。

二十一年の歳月をかけて、ふるさと文化祭はしっかりと福崎町に根をおろし、枝葉を広げています。

これからも、福崎町の豊かな自然と歴史、そして、人々のぬくもりの中で、ますます「ふるさと文化祭」が発展していくことを願っています。

公民館クラブの紹介

「いなみ野神崎」グループ

代表　内藤正登
芸能担当　松岡宏信

私たち「いなみ野神崎」グループは、昨年十月に福崎町公民館クラブに登録し、文化センターでおこなわれました秋祭り芸能発表会が初舞台で、傘踊りとハーモニカ演奏に出演させて頂きました。私たちのグループの活動状況について少しご紹介をさせていただきます。

平成十四年にボランティアグループ「いなみ野神崎」として神崎郡三町（福崎・市川・神河）に在住する、県立いなみ野学園地域活動指導者養成講座の卒業生と現役学年により結成しました。目的は、地域における健康活動や福祉活動、社会参加活動を通して、地域の暮らしの向上に貢献することです。現在会員数は三十六名で、活動範囲は郡内が中心です。

具体的な活動としては、

※文化活動として、南京玉すだれ・傘踊り・皿回し・ハーモニカ・マジック等慰問活動や地域のイベントに参加

※健康福祉活動は、郡内親睦グラウンドゴルフ大会及びシニアニュースポーツの普及活動・養護施設の車椅子点検

※環境美化運動は、公共施設・公園等の美化清掃です。

活動内容も多種多様にわたり、年々活動量も増加しており要望に出来るだけ応えられるよう、活動内容に応じてそれぞれ分担して対応しています。ただ、芸能関係の練習の機会が少なく、時間・場所の確保に苦慮しています。

絵手紙に心ときめき、癒されて
絵手紙山ももグループ

三輪吉正

「人生僅か五十年」と言ったのは、一世紀前のこと、21世紀に入り「人生八十年代の寿命、長寿社会」の今日である。私が絵手紙を始めたのは、今から十年前のことである。職域を退職して、故あって、八千種郵便局に頼りないガードマンとしてお世話になっていた時、当時は郵政省発行の、郵便番号簿に絵手紙の挿絵が掲載されていたものである。この事が契機となり、八千種郵便局、局長が絵手紙教室を立ち上げられたのである。最初のクラブ員は、三十数名の女性達ばかりの、サークルであった、私が入会したのは、絵手紙クラブとして発足一年後の時である。文字通り「六十の手習」として、女性ばかりのクラブに、気もそぞろに、蛮勇をふるって入部してからはや十年の才月が流れて往きました。講師の美藤先生から、「三輪さん、ぼちぼちやりましょうや」と声を掛けられ、やっと居心地がついたのを鮮明に覚えています。二十一世紀の今日情報の多様化とマスメディア、報道機関、IT等の著しい発展と進歩、スピードアップの慌しい世相の中にあって、先取り情報の把握に躍起となっている社会形態には、へきえき、するばかりである。それに反して手紙、葉書、絵手紙のように、紙面を手書きの文章で手にした時の喜びは、また、格別な味わいがある。ことに絵手紙で、四季おりおりの便りが届いた時、思わず心がときめき、何故かほのぼのと癒される心地がする。たとえその絵が上手であろうと、下手であろうと思わず笑みがこぼれてしまう。「たかが絵手紙、されど絵手紙」である。私が入院された知人に狸の絵手紙を出したところ、退院後あの絵を見て元気を、もらったんやと言われた時は、本当に私も嬉しくなったものである。たった一枚の葉書きの裏に描いた絵が、人様の心を暖かくするとは思いもかけぬ事であった。これからも一途に学習に励み、心をこめて筆をとり、一人でも多くの人に、送り続けたい。ほんの一瞬だけのときめきを届けたいと思う。それが私にできる出来る人々への感謝の奉仕である。

箏曲クラブ

井奥昭子

「三味線を弾いてみたいけどなんだか難しそう・・お琴って敷居が高いイメージだわ」なんて思われがちですが、楽器が初めての方でもわかりやすい手ほどきで、目に見えて上達します。仲間達の交流や合奏などもあります。繊細な絹糸の音色・絃の響き余韻を楽しんでみませんか。楽器がなくても始められますのでまずは気軽にお問い合わせ下さい。体験レッスンも受け付けております。

毎金曜日
午後五時より
生田流　井奥
文化センターにて
TEL
二二一六七四〇

都山流尺八クラブ

古くから日本に伝わる楽器、尺八の魅力、それは竹の響きが創り出す音色。悲喜の感情を一本の尺八で豊かに表現する事ができる楽器でもあります。

優雅な古典の音楽に触れて心豊かなひとときを過ごす機会を皆さんも一度体験してみませんか。

毎週月曜日　午後四時～
マンツーマンによる指導です。
連絡先　TEL　二二一三九〇〇
古田まで
女性の方も大歓迎。（体験用尺八『持

ち帰り可』もあります。）

福崎町短歌会の活動について

代表　山下清市

昭和31年5月合併、新しい福崎町が発足、広報ふくさきは昭和34年発刊。短歌作品が広報に掲載されたのは昭和57年広報200号から始まりそして、現在480号まで掲載されました。

短歌会の概要

指導者は岩朝加都良先生

①毎月第二土曜日勉強会（午后）

②山桃忌奉賛献詠短歌会の賛助

③年二回の発表会　文化祭にて展示

④広報ふくさきに作品掲載

福崎町は、文化の先進の町で井上通泰、柳田國男先生の二人が代名詞です。戦後はいち早く、木村真康氏・西賢治氏の先達によって福崎町短歌会は礎が出来ました。現在の会員は14名です。和歌短歌といえばだれしも、近より難く思われますが、小鳥でも春になれば食むだけでなく、花に囀り、生きる喜びも悲しみも感じている筈です。五七五七七の31文字に日頃の想を感ずるままに、歌にしては如何ですか。短歌会では会員を募っております。今後共町民の「短歌会」にご支援をお願いします。

第二十六回町展作品募集

第二十六回福崎町美術展（公募展）の作品を募集します。

皆様方のご応募を心よりお待ちしています。

◆会期　五月十六日（金）～五月十八日（日）

◆会場　エルデホール

◆部門　日本画・洋画・書・写真・彫塑工芸

応募は一部門一人一点、未発表の作品に限る

◆作品搬入　五月十日（土）午前九時～午後四時

◆審査員

日本画　青田　賢蔵

洋　画　門脇　正弘

書　井上　映粧

写　真　北村　泰生

彫塑・工芸　牛尾　啓三

山桃忌奉賛 第二十三回短歌祭作品募集

柳田國男先生と井上通泰先生の命日にちなみ、両先生を忍ぶ会として、毎年八月に柳田國男・松岡家顕彰会により山桃忌が行われています。

短歌会は文化協会と福崎短歌会により、山桃忌当日行っています。本年の短歌会は、左記の要領で作品募集の予定です。

記

日時　平成二十年八月上旬

場所　柳田國男・松岡家顕彰会記念館二階

主催　福崎町文化協会・福崎短歌会

作品　未発表のもの・一人二首以内

応募料　一首につき五百円

要領　現金または小為替

原稿用紙に楷書で縦書き

宛先　福崎町文化センター内文化協会事務局　宛

締切　平成二十年六月十日

賞　通泰賞・町長賞・議長賞・教育委員会賞・顕彰会賞・文化協会賞・商工会賞・JA兵庫西賞・神戸新聞社賞の各賞と佳作数点

選者　川口　汐子　先生（をだまき同人）

＊表紙の写真＊

福崎町を通る「銀の馬車道」と辻川界隈の大庄屋「三木家」です。銀の馬車道は、明治の初め、日本有数の銀山として栄えた生野鉱山と飾磨港の間、約49kmを結ぶ道として新しく作られ、正式には「生野鉱山寮馬車道」と呼ばれた、当時の高速道路というべき馬車専用道路です。完成から約130年がたった今では、道の大部分は車が走る国道や県道に変わり、一部は新幹線姫路駅になっています。しかしながら、「銀の馬車道」のルートをたどれば、あちらこちらに記念碑などがあり、往時のおもかげを残しています。豊かな暮らしを夢み、ファイトを燃やした昔の人たちの気持ちになって、「銀の馬車道」をたどってみませんか！

編集後記

たくさんの方々のご協力により、第二十四号を発刊することができました。

玉稿をお願いしました皆様方には、大変お忙しい中を、快く執筆、ご協力くださいまして、本当にありがとうございました。皆様方に、心からお礼申し上げます。